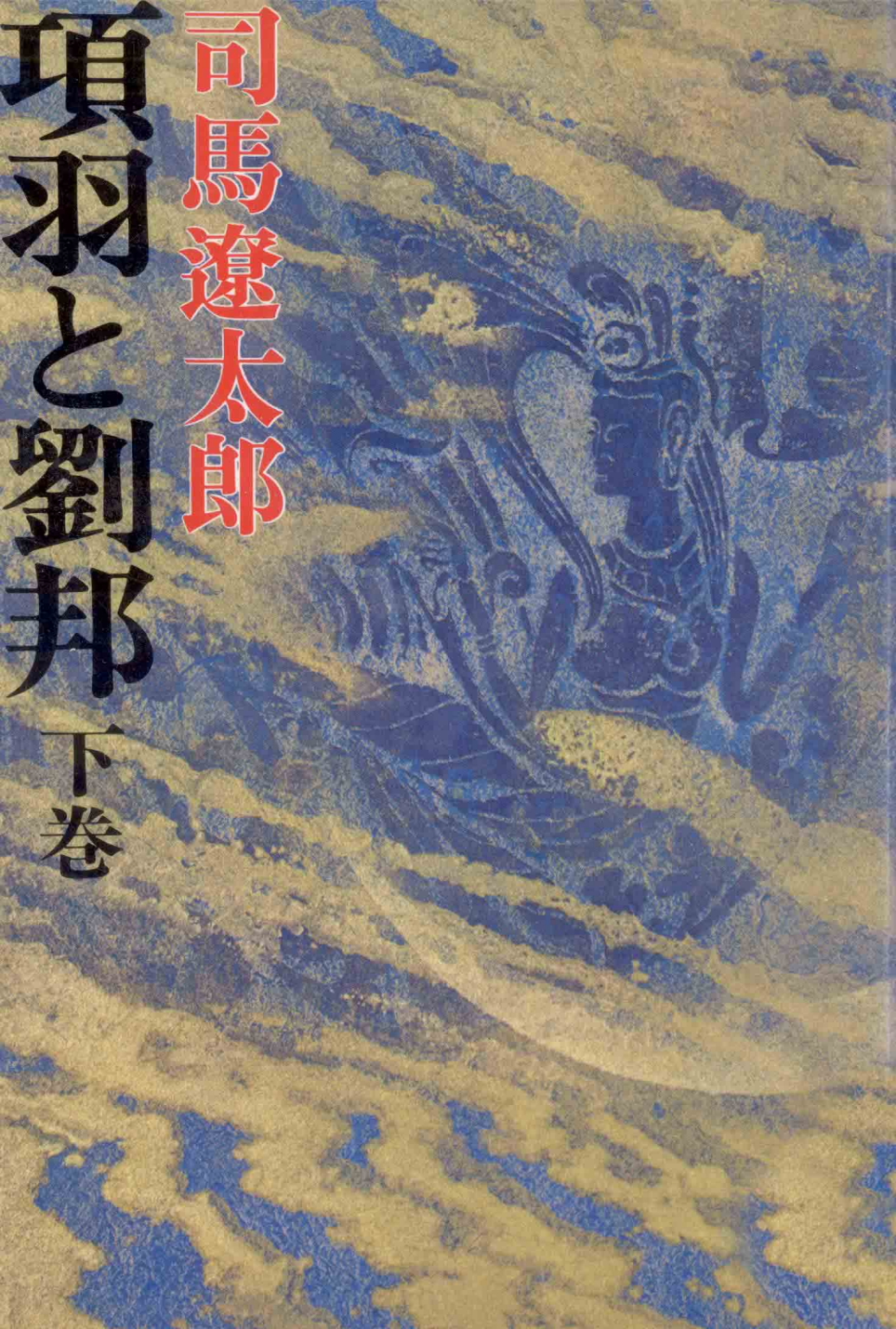


司馬遼太郎

項羽と劉邦

下卷



項羽と劉邦

下卷

司馬遼太郎

新潮社版

項羽と劉邦（下巻）

発行 昭和五十五年八月五日

五十二刷 平成五年五月十五日

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社



発行所

郵便番号一六二／振替 東京四一八〇八

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 営業部（366）五一二一／編集部（366）五四一一

株式会社

新潮社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社読者係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

©Ryotaro Shiba, 1980・Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-309731-0 C0093

目次

背水の陣	5
齊の七十余城	34
半ば渡る	72
虞姫	103
弁士往来	140
平国侯の逐電	175
漢王百敗	207
烏江のほとり	228
あとがき	280

装画・扉题字／下田義寛

項羽と劉邦

(下卷)

背水の陣

韓信は、転戦している。

かれは漢の上將軍とはいえ、劉邦のそばにいるわけではない。

つねに別働軍の将であった。当然ながら劉邦にはかれ自身の戦局がある。これに対し韓信はそれと同心円の戦局の中に身を置きつつ、劉邦の円よりもずっと外側で円をえがき、転々と戦場を動きながら勢力を増大していた。戦えばかならず勝った。

「異彩だ」

ひとびとはいった。弱い漢軍のなかで、例外的な光を放っているのは韓信とその軍だったからである。

——韓信は自立するのではないか。

と、劉邦側近のひとびとは、口にくそ出さなかったが、かすかに警戒の目をもつてながめていた。「酈生」と半ば敬せられ、半ば軽んじられている儒者の酈食其老人も、そのひとりだったといっている。人の姓や名に生をつけてよぶのは、後世、書生の生になるが、この時代は先生というにちかい。

鄭生は、韓信がすぎであった。

「木で鼻をくくったようなあののっぴめが」

と鄭生がいうときは、愛情をこめていた。あいつの目はわるくない、何を考えているのか知らないが、という。

たしかに韓信は目だけは子供っぽかった。長身で、頬はまだ果物のようなつややかさをうしなっていない。ただ手入れを怠った黒いひげがごみのように顔の下半分に散らかつていて、放心すると垂れたひげを唇のはしで噛んでいたりする。そのあたり淮陰（江蘇省）城下の浮浪者の感じがぬけきっていない。

「お前さんは、とても儒者にはなれないね」

鄭生がからかったことがある。

「その目だけでだめだよ」

鄭生のいうには、儒者は大人びて深沈とした目を持っていなければならない、つねに自分の容儀にこまかく注意をはらい、人の前に出るときには威を内に秘めつつその外貌は温雅、その態度は恭儉、なかなかむずかしいものだ、という。

むろん、韓信は淮陰の貧士だったところから、一度も儒者になりたいなどとはおもわなかった。儒者など、葬式、墓参のたぐいの儀礼をことごとしく言うだけの存在で、葬式屋の顧問のようなものではないかと思っている。

「鄭老」

と、韓信はこの老人をよんでいた。

「たれも儒者にしてくれと頼んではいませんよ」

韓信もこの老人が好きであった。

「大きなまちがいだ」

すこし儒教を教わるほうがいい、と酈生はいった。

「たとえばお前さんには、規準というものがないよ」

「なんの規準です」

「人としての生き方の規準、物の考え方、あるいは行動の仕方についての規準だ」

「規準はないほうがいいんです」

韓信は、蠅を追うようにいった。

酈生は、教えようとしている。

「規準を学問という。規準のない人間は、人から信用されない。美でもない。美でなければ人から敬愛されない」

敬愛とは、具体的には、王である人や上長や同僚から好もしく思われるということであろう。

「敬愛されるということは、要するに無害な人間として愛玩されるということではありませんか。お言葉を返すようですが、私の志とはちがいます」

「どういう志だ」

「それがわかれば、世話はない」

韓信は、笑うと、こどものような顔になった。

右の対話は、韓信がなにかのことで劉邦に拝謁すべく前線からやってきたときの情景である。場所がかつて県庁の庁舎であった建物の前庭で、大きな槐が葉を上げらせていた。酈生はその木蔭に入り、石に腰をおろしていた。立っている韓信は背に熱い陽ざしをうけて、酈生のために蔭をつくってやっている。長剣を杖がわりに突き、体の重みを半ば託していた。

「汚い剣だな」

酈生はからかった。

「しかも長すぎる」

たしかに韓信の剣は異様に長い。それに櫛頭の塗りが剥げ、青銅の飾りの小さな怪獣が磨耗し、鞘は傷だらけになっていた。

「私にとって、大切な剣です」

かれが淮陰城下で、洗濯婆から食をめぐまれながらほつき歩いていたところからの剣であることは酈生も知っていた。韓信が漢の上將軍になってからもなおその頃の腰のものを離さないというのは、この男の感傷なのかどうか。

「要するにその剣も、あなたの自己愛のあらわれにすぎないんじゃないか」

酈生は、韓信というつかみどころのない男の精神を、袋の中のものでもさがすように手探っている。

「私に自己愛などありませんよ」

「ではその剣はなんのしるしだ」

「淮陰の頃の自分の気分かな。志といえばそうもいえません」

「幼いことを言うわい。……しかしお前さんののは」

志じゃないよ、と酈生は言いかけて遠慮した。酈生は当節、士の志というべきものは天下の蒼生を戦乱からすくい、これに食をあたえ、しかるのちに儒教という人間が人間であるための規律を与えることだ、と思っている。それには天下を興すに足る人を立て——劉邦のことだが——これを輔け、これに天下をとらしめることが先決だと考えているのだが、韓信の場合はどうであろう。

（こいつの正体はなんだ）

酈生は、考えた。この時代、乱世に身を投じた士卒のたれもが富貴を望んだ。しかし韓信は変り者

で、富貴を望まないに似ている。というより富貴とは何かが天性よくわからないのではないか。すくなくともそういう感覚に欠けるところがあり、たとえば一面、この男には貧窮のほうが似合っており、たとえ貧窮のまま生涯を送っても、他人の富貴をそねむところは全くないのではないか。

(この男の本質は、つまりは才能ということか)

酈生はおもった。才能だけが独立し、目も鼻も理性も抑制力ももたずにまるい物体として谷を越え、山をかけのぼり、どこまでもころがってゆくなにかではないか。

(せめて、忠誠心でもあれば)

酈生はおもっている。

俠客あがりの諸將の多くは儒徒ではなかったが、忠誠心だけは持っていた。かれらはむしろそれを売り物にして劉邦とつよく結びつき、蝶が花に嘴をのばして蜜を吸うように劉邦から利益を吸いあげようとしていた。

劉邦は、そういうエネルギーの上に浮上している。かつて劉邦は、

——お前たちはいい男だが、何の頼りにもならない。

と、左右をかえりみて言ったことがある。彭城(徐州)の大敗戦後、沼沢にさまよっていたときのこと、配下たちの頼りなさに劉邦自身、頭をかかえこんだ時期のことである。配下からいえば、無能であるために忠誠心だけで劉邦にぶらさがっていた。

韓信は、そのたぐいの男ではなかった。それだけに劉邦の忠誠な側近団に油断のならぬ男と見られている。酈生も時にそう思わぬでもない。

劉邦は、いそがしかった。

滎陽城から身一つで逃げだし、その根拠地の関中へむかった。そのあとを、項羽は追わなかった。

もし項羽が全力をあげて劉邦のあとを追えば、歴史に漢帝国というものはなかったろう。追うことを献言する者がいなかった。もはや范増は去り、竜且や鍾離昧など不世出ともいふべき猛將たちは前線にあり、しかも意見を差しひかえていた。かれらは項羽から疑われていた。この猜疑は陳平が項羽にかけた魔術にすぎなかったし、項羽もほどなくそれが敵の詐略だと気付くのだが、疑われた側の気分は晴れなかった。かれらが沈黙している以上、項羽の身边には親類縁者しかおらず、策をたてる能力の者などいなかった。

それでも項羽とその楚軍は、漢軍を殲滅できるほどに強大であった。であるのに、身一つで逃げた劉邦を追えなかったのは、ゲリラが項羽の足をひっぱったためであった。

「鉅野（山東省）の漁師め、また出おったか」

項羽は、劉邦を追おうとしてそれを断念したとき、鞭をあげて地を打った。鉅野の漁師とは、彭越のことであった。かつて鉅野の沼沢で漁師をしつつ野盗の親分でもあったが、この乱世のなかで遅れて挙兵した。やがて漢王劉邦の傘下に入り、諸方で楚軍と小さく戦い、小さく破った。盗賊あがりらしく敵の弱点を見つけることが上手で、敵が強いときは穴にもぐるようにして頭を出すことはなかった。項羽が滎陽城の劉邦をかこんでいたときも、彭越が遊軍を指揮して後方の補給路をおびやかす、これに対して項羽はいちいち応酬したため、滎陽城に対して打撃力を集中することができなかった。劉邦が滎陽城を逃げだしたときもそうであった。

「彭越など、虻のようなものではありませんか」

と、項羽の身边にもそのようにいつて黙殺することをすすめる者もいたが、項羽は鹿をにがしてもし額を刺す虻をゆるせなかった。

つい主力をひきさげて旋回し、彭越軍を大いに敗った。彭越は奔り、その軍は四散した。このおかげで、劉邦は虎口を脱し、関中にむかった。

劉邦は根拠地の関中へ帰ると、再び勢いをもちかえした。

関中はつねにかれの再起のための活力源になった。ここで新徵募の兵を得、糧をあつめ、軍を新編成した。

「榮陽を救うのだ」

と、呼号した。むろん本気であつた。この時期、かれが置きすてた榮陽城はなお健在で、残留の將の周苛が、城壁一重をたよりに楚軍と惡戰苦闘していた。

—— かならず榮陽に再来して救援する。

ということ、劉邦は周苛にもいい、諸將にもいつていた。味方に対するこの約束をはたさねば、劉邦は信をうしなう。味方の忠誠心の上に浮上している劉邦としては信だけで立っている。ひとびとに信じられなくなれば、劉邦のように能も門地もない男はもとの塵芥にもどらざるをえない。

—— 出来そこないの田舎俠客、沼沢のなかの泥ふなのような草賊の親分。

というのが、劉邦も自認しているかれの前半生であつたが、その経験で学んだことといえば子分や兄弟分に対する信しかなかった。信が、めしを食わせてくれる。なんとか人が集まり、人が協けてくれた。

挙兵のときもそうであつた。人望といい、吏才といい、物事をふかく考える能力といい、蕭何のほうかはるかに上で、沛の父老たちも、

—— 蕭何さんを立てればどうか。

と、少年たちに説いていた。蕭何はそれを辞し、みずから劉邦を推戴して衆にもすすめ、自分はいくだってその事務役にまわった。ひとびとは劉邦をいかがわしく思ったが、蕭何は動かなかつた。劉邦には信がある、と蕭何は思っていたのである。

(……しかし、ここで)

周苛たちを救うべく再び滎陽へゆくということは項羽に再び敗け、こんどこそ殺されるということであつた。

(虎の顎のなかにもどるということだ)

関中の咸陽での劉邦は、身の処すすべもないほどに苦しかった。

この時期、惑乱したこともある。

「たれか、いないか」

おれに代りたいという者は——と、食事の途中、箸を投げだしてわめいたのである。

本気であつた。それ以上に切迫した思いで、声は半ば泣いており、表情は運命にむかつて哀願しているようであつた。項羽にはとても勝てない、自分は巴蜀の山の中に退いて百姓でもしたい、巴蜀は遠い、沛のほうがいい、もし出来れば沛にわずかな土地でももらつて老後を送りたい、と叫んだ。

劉邦は、天下に望みを持つなどという気持は捨てていた。捨てれば、気が楽になつた。

「たれかいないか」

おれはその男に代る、と叫びつづけた。さしあたっては、滎陽へゆくことがこわかつた。しかしゆかねば、信をうしなう。

そのまわりには、食事の給仕人しかない。かれらはあわててひとびとに連絡した。張良らが入ってきた。

「張良、お前、どうだ」

劉邦はすぐわれたように張良の袖をとり、自分がすわっていた場所にすわらせようとした。卓子の上には食ひ残しの料理が散乱していた。張良はしずかに劉邦をすわらせ、あなたしかないのだ、ということを諄々と説きよかせた。

劉邦は顔をあげて、ぼう然としている。

（この陛下は、榮陽へゆくことのみを怖れているのだ。それだけで錯乱したのだ）と、張良は劉邦の心事を察した。しかしどうすることもできない。

このとき末座から、

「策を申しあげてよろしゅうございますか」

と言った者がある。袁生という、平素めだたない男であった。

「袁生か」

劉邦は、ふしぎな顔をした。こんなつまらない男がおれに代りたいというのか。

「直接榮陽へいらっしゃることは、かえって周苛たちを敗死させることになります。いったん南方の宛（南陽）へお出遊ばせば、榮陽城も息をつくことができ、項羽も奔命に疲れる、ということにもなりましょう」

「お前はなにを言っているのだ」

劉邦の叫びに対する答えにはなっていない。

「くわしく申しあげます」

と、袁生はいった。

関中台地を自然の一大城廓とすれば、その正門（東門）が函谷関にあたる。ほかに南門（正確には南東方面への門）として、武関の開口部があった。袁生のいうのはこの函谷関から出ず、武関から打って出なさい、ということである。しかるのちに南方の宛の城に入り、付近の葉（葉県）の城をもおさえてあらたに南方戦線を形成せよ、ということであった。この間、項羽は北方（黄河沿岸）の榮陽城を攻囲している。南方の異変におどろき、項羽自身、あわてて主力をひきいて南方の宛にやってくるにちがいない。その間、榮陽城は息をつける、というのである。

「項羽はかならず宛にくるか」

と、劉邦は問うた。

来るにきまっています、と袁生はいう。

「項王のめあては、おそれながら陛下のお首級しゅきゅうしかないのでございますから」

「わしの首を餌にするのか」

劉邦は、おびえた。平素こういう顔つきをする男ではなかった。

このとき張良がことさらに陽気な声を出して、袁生の策をほめ、それしかごぞいませぬ、と言ったために劉邦の気持は落ちついてきた。

「しかしわしが宛へ行っただけでは、どうにもなるまい。項羽が南下してきてわしの首をとるだけではないか」

「南下した項羽の足を、また北方からひっぱるのです」

と、張良がいう。

「彭越ほうえつに働かせるのか」

「彭越ではまだまだ力が足りませぬ」

「では、どうする」

「北方で韓信かんしんに働かせるのです」

韓信が、つねに主要戦局の圏外にいたことは、すでにふれた。

この男がもとめてそうなったからではなく、劉邦が命じたからであった。話は、すこし前後する。さきにまだ魏王ぎおうの豹ひょうという食わせ者の旧貴族が元氣だったころのことである。豹は戦いくさによわい劉邦に見切りをつけ、項羽と結ぼうと思ひ、母親を看病したい、といって籠城中の滎陽けいやうを去った。河北かへき（黄